令和５年度　１２月の園だより

第二みみょうこども園

≪子どもたちの主体性向上のために≫

先月中頃まで気温25℃を超える日々が続いていましたが、一気に寒波の訪れがあり、急に冬がやってきました。また、当園においても、子どもも大人もインフルエンザ感染者が急増しています。ご家族皆さん、急な体調の変化にお気を付けください。

さて、先日のことです。園の玄関において、1歳児の子どもがマットの上に座り込み、小さな靴を自分で履こうとしていました。靴の踵（かかと）がなかなか入らず、小さな指を入れたり、出したり、足を伸ばしたり、縮めたり、また、時に「ふんっ、ふ～ん」と声を漏らしながら、しばらく頑張っていましたが、数分経った頃でしょうか、ついに履ききることが出来、立ち上がって喜びを表すように飛び跳ねていました。その間、ずっと、その子のすぐそばには、その姿を温かく見守り、時に優しく応援し、待っている母親がおられ、「自分でできたね。すごい、すごい。」と声をかけて、喜びを分かち合っていました。

何気ない光景ではありますが、ここには子どもの主体性を尊重したかかわりを感じました。子どもが自分で頑張っている姿をしっかりと見守りながら、しばらくの間、待ち、見守ることで、子どもの実行力や達成感を満たしてあげるとともに、出来たときの喜びを分かち合うことで自己肯定感が高まります。

逆に、同様の場面において、「子どもが靴を履けないで困っているから」「時間がないから」と、すぐに履かせてあげることをすればどうでしょう。子どもからすれば、靴は履かせてもらえるものだと思い、次から自分で履こうとしなくなるかもしれません。靴を自分で履けた際の、自分でできた、頑張ったという達成感や満足感を奪っているかもしれません。また、例え、靴を最後まで履くことが出来なかったとしても、助けを求めたり、甘えたりする発信力や人との関わりを阻害してしまっている可能性さえあります。いわば、子どもが主体的かつ前向きに取り組もうとしてる時の余計な手出し、口出しは子どもの成長を妨げるといっても過言ではありません。

出勤時などの忙しい時間帯や親御さん自身気持ちに余裕がない時、子どもたちが自分でやろうとしていることを見守ること、待つことは、なかなか難しいこともあるかもしれません。しかし、子どもたちの根っこが育つ時期は“今”しかありません。可能な限り、子どもたちへの関わりにおいて、子どもたちがチャレンジしようとしていること、探求していること、熱中していること、難しいことに立ち向かっていることがあった場合、子どもを主体とした“待つ”、“見守る”ということを心がけてみてください。

また、当法人の保育は、子どもたちに何かを教え込んだり、やらせたりすることを目的としていません。子どもたちの思いを察したり、子どもたちと対話したりする中で、やりたくなる気持ちを刺激することで、自分で考え判断することを大切にしています。そのためには、生まれたときから子どもたち一人ひとりを一人の人格を持った存在として接したり、子どもの思いを汲み取り、工夫したくなる環境を作ったりする必要があります。（参照：園内報第 63 号教育研究機構会長運営方針）いわば、子どもたちが何を思い、何を感じ、何を欲し、何を望んでいるのか、その心もちを知り得ることで、子どもたちの主体性向上を育む環境づくりを行うことができます。

引き続き、ご家庭とともに子どもたちの育ちや思いを尊重し、子どもたち一人ひとりの主体性向上に向けた、応答的な、丁寧なかかわりを行っていきたいと思います。

園　長